

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19592551
 研究課題名（和文） 新生児・乳児の泣きへの対応を含めた育児支援プログラムの作成
 研究課題名（英文） Development of a child care support program for parents dealing with Baby crying
 研究代表者
 岡本 美和子（OKAMOTO MIWAKO）
 日本体育大学女子短期大学部・幼児教育保育科・教授
 研究者番号：70435262

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、出産後早期の母親のための子どもの泣きへの対応を含む育児支援プログラムを作成し、その支援プログラムの介入効果を分析することである。介入の結果、子どもの泣きによって生じる母親としての自信の揺らぎを改善する効果がみられた。また、子どもの泣きに関する適切な情報と有効な支援者を得ることができていた。しかし、子育てのための地縁作りについては、明らかな効果はみられなかった。調査結果を参考に、今後は育児支援プログラムの介入時期について、さらに検討していく必要がある。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study is to create a child care support program for mothers dealing with baby crying in early puerperium. And the action research is to analyze the effects of intervention a child care support program. Result of the intervention showed effects caused by the crying of baby at shaking in confidence as a mother. The mother was able to get the appropriate information and effective support for baby crying. However, making for neighborhood social organization showed no obvious effect. Referring to the findings, it is necessary to consider the timing of intervention child care support program.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学（臨床看護学）

キーワード：育児支援、子どもの泣き、情緒的動揺、初産婦、新生児・乳児、苛立ち

1. 研究開始当初の背景

(1) 子どもへの虐待の増加が社会問題として深刻化している今日、養育者による虐待行為への直接的誘発要因の1つに、子どもの泣きが関連していることが明らかになっている。母親が対処に困難を感じる原因不明の子どもの持続する泣きは、出産後 2~3 週頃に出現し、6~8 週をピークにその後減少し、3 ヶ月過ぎまで持続する。

(2) 申請者が実施した先行研究から、出産後 2 ヶ月までの初産婦が持続する子どもの泣きに直面し、強い不安感と共に情緒的動揺を経験しており、これらが長期化することで無力感に至ることが明らかになった。

(3) 子どもの泣きによって生じる情緒的動揺と、母親の置かれている社会的な背景には関連が認められている。特に、居住地域での地縁がない、育児情報に困惑している、有効な支援が不足していることとの間には因果関係が示されている。

(4) 出産後早期から、母子の居住地域における子育て地縁作りの強化、子どもの泣きと対処に関する情報の提供、不安と疲労感を軽減のするための有効な支援獲得のためのアプローチの必要性が見えてきた。

2. 研究の目的

・子育てを行っている女性にとって、情緒的動揺が繰り返されないための周囲からの適切な介入は母子の心身の健康に関わる重要な支援の1つである。そこで本研究の目的は、看護介入の一環として出産後早期からのより効果的な育児支援プログラムを作成することである。

3. 研究の方法

(1) 原因不明の子どもの持続する泣きが落ち着いてくるといわれている 3~4 ヶ月時点の初産婦を対象に、情緒的動揺に関する横断研究を実施、関連要因の探索を共分散構造分析により行う。

(2) 明らかになった情緒的動揺に至る関連要因と申請者が実施した先行研究を参考に、育児支援プログラムに必要な内容を吟味、看護介入の方法と使用するツールを考える。

(3) 育児支援プログラムを作成する。プログラムに沿って、泣きが最もピークとなる出

産後 1~2 ヶ月の頃をターゲットにした看護介入を行う。介入に必要なパンフレット及び調査資料を作成すると共に、介入実施後の情緒的動揺に対する効果を分析する。

4. 研究成果

(1) 出産後 3~4 ヶ月頃の持続する子どもの泣きに起因する初産婦の情緒的動揺と関連要因の構造を明らかにした(図 1)。

研究方法は自己記載式質問紙による横断研究で、東京都内の保健センター4 施設に乳児健診で来訪した初産婦 216 人に質問紙を配布、162 人(75%) から回答が得られた。対処し難い持続する泣きを経験している母親が 56 人、そのうち、情緒的動揺の経験者が 37 人であった。情緒的動揺の内容としては、先の見えない不安、泣き止まないことへの苛立ち、母親としての自信の揺らぎ、そして無力感であった。

分析の結果、情緒的動揺との関連要因には、「有効な支援提供者」が身近にいないことで、子どもの泣きに関する「情報困惑」が生じ、また、「子育て地縁」が薄いことで「泣きへの支援」が得られにくい結果、「不安と疲労感」が増し、結果的に「情緒的動揺」を引き起こすという構造がみられた。

「子育て地縁」と「有効な支援提供者」が共変関係にあることから、この 2 要因の強化、充実が出産後早期の子育て支援に重要であることが認められた。

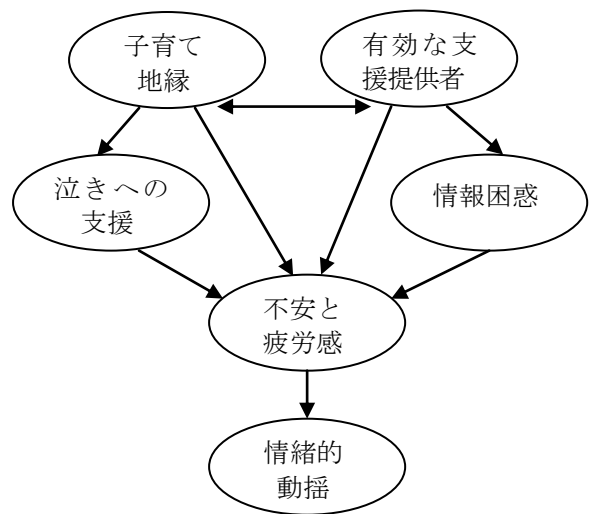


図 1 情緒的動揺と関連要因の因果モデル

(2) 育児支援プログラムの内容検討

- ・対処に困難を感じる泣きが頻繁に認められる期間に焦点をあてた、支援介入としての育児クラスを開催
- ・「子育て地縁」構築の一環として、親子が居住する地域での仲間作りを目的とした自由に集える場の提供
- ・子どもの成長に伴う泣きの変化と具体的な対処方法の提供、また、帰宅後のパートナーと共に読み、再確認できるパンフレット(タイトル:「泣き顔のち笑顔」)を作成
- ・「有効な支援提供者」として、パートナーに期待される支援内容と役割をパンフレットに記載、母親と共に話し合うことの必要性について紹介
- ・「不安と疲労感」の軽減に繋がる、母親の居住地で利用できる社会資源の説明と紹介

(3) 育児支援プログラムに沿って、泣きが最もピークとなる出産後 1~2 ヶ月頃に焦点を当て看護介入を実施する。

①研究方法

- ・自己記載式質問紙法による縦断的研究とする。

研究実施施設における倫理委員会承認後、対象者に対し入院期間中、育児クラスについて病棟スタッフが退院指導の中で初産婦全員に紹介する。育児クラスへの参加は母親の自由意志によるもので、参加希望者は1 ヶ月健診後のクラスに予約する。調査への同意が得られた対象者に対し、質問紙の1 回目を出産後 3~4 週、2 回目を 6~8 週、3 回目を 12~16 週頃に育児クラス参加及び不参加者全員に送付する。回答は無記名で同封した返信用封筒で郵送にて回収する。

育児クラスは育児支援プログラムに沿った内容とした。開催時期は、質問紙の2 回目配布直前の頃とした。

- ・データの分析方法

統計処理は統計ソフト SPSS Ver15 for windows を用い、各指標に関して記述統計と t-test、 χ^2 test を行った。有意水準は5%とし、育児クラス参加・不参加の各群内における母親の情緒的動揺の経時的な変化について分析する。

②結果

- ・110 名から研究協力の承諾を得た。そのうち 106 名(96%)から回答を得ることができ、出産後 12~16 週まで追跡できたのは 100 名(91%)であった。
- ・100 名のうち、育児クラス参加者 36 名(36%)、不参加が 64 名(64%)であった。母親の平均年齢は、育児クラス参加群で 33.4(±5.5)歳、「なし」群 32.9(±5.5)歳であった。基本属

性及び疲労感、不安感等について育児クラス参加、不参加の両群における検定を行った結果、有意な差は認められなかった。

・育児支援プログラムによる介入の結果、子どもの泣きによって生じる情緒的な動揺の中の「母親としての自信の揺らぎ」(VAS: 0~10 点)に有意な減少効果がみられた。また、子どもの泣きに関する適切な情報と有効な支援提供者獲得についても、長期的な効果がみられた。しかし、子育て地縁作りについては、明らかな効果は認められなかった。

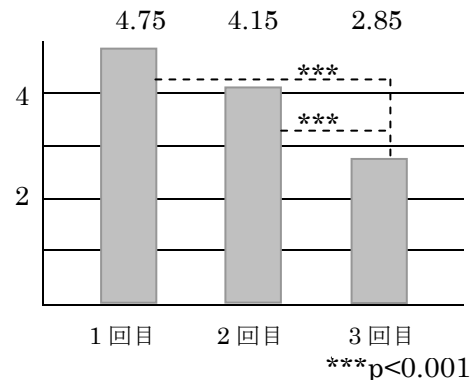


図2 母親としての自信の揺らぎ

- ・調査結果を参考に、今後は育児支援プログラムの介入時期について、妊娠後期を含めた検討を、さらに行っていく必要があると考えた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 岡本美和子, 松岡恵, 時本久美子, 出産後 3~4 ヶ月の子どもの持続する泣きに起因する初産婦の情緒的動揺と関連要因の構造分析, 子どもの虐待とネグレクト, 査読有, Vol.12 No.1, 2010, pp108-118

② Miwako Okamoto, Megumi Matsuoka, Causal Model Structure Analysis of Emotional Unrest in First Time Mothers Faced with Persistent Infant Crying 6-7Weeks Postpartum], Asian Nursing Research, 査読有, Vol.3 No1, 2009, pp.1-14

③ Miwako Okamoto, Megumi Matsuoka, Structural analysis of factors related to frustration in first-time mothers facing persistent crying in 6 weeks-old

infants」, Medimond ISPOG-XV, 2007, pp. 339-p. 343

[学会発表] (計3件)

① Miwako Okamoto, Megumi Matsuoka, Structural analysis of factors related to frustration in first-time mothers facing persistent crying in 6 weeks-old infants, International Society of Psychosomatic Obstetrics and Gynecology, 2007

② 岡本美和子, 松岡恵, 時本久美子, 子どもの泣きに起因する母親の情緒的動揺と関連要因の構造分析～虐待予防を目指した泣きへの対応を含む出産後早期からの子育て支援プログラム作成の試み～, 日本子ども虐待防止学会, 2008

③ 鳴海恵, 久保絹子, 岡本美和子, 大学病院における出産後早期からの育児支援プログラム, 東邦大学看護研究会学術交流会, 2009

[図書] (計1件)

① 岡本美和子, 泣き顔のち笑顔, 保育専門研究室, 2009, pp1-10

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

○取得状況 (計◇件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡本 美和子 (OKAMOTO MIWAKO)
日本体育大学女子短期大学部・幼児教育保育科・教授
研究者番号 : 70435262

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

松岡 恵 (MATSUKA MEGUMI)
静岡県立大学・看護学部・教授
研究者番号 : 90229443

時本 久美子 (TOKIMOTO KUMIKO)
日本体育大学女子短期大学部・幼児教育保育科・教授
研究者番号 : 50105011

奥泉 香 (OKUIZUMI KAORU)
日本体育大学女子短期大学部・幼児教育保育科・教授
研究者番号 : 70409829

